

マルク・ミーチン評伝

セルゲイ・コルサコフ 著 / 市川 浩 訳

【訳者序】ここに訳出するのは、ロシア科学アカデミー・自然科学史Ⅱ技術史研究所編「一九二〇～五〇年代における科学アカデミーの科学者たち―写真家モイセイ・ネペリバウムの肖像写真コレクション（伝記的解説付）―」（モスクワ、自然科学史Ⅱ技術史研究所刊、二〇一〇年）に所収されたセルゲイ・コルサコフ氏による伝記的解説「ミーチン（ゲルシユコヴィチ）、マルク・ポリソヴィチ」項（同書、二七一～二八〇ページ）である。訳出については同氏の了解をえている。訳者注は本文中に【】に括弧して示した。末尾に解題を掲げている。

ミーチン（本姓ゲルシユコヴィチ）、マルク・ポリソヴィチは一九〇一年ユリウス暦六月二二日（グリゴリオ暦七月五日）、ジトミール【ウクライナの都市】に生まれ、一九八七年一月一五日、モスクワで没した。一九三九年以来の科学アカデミー正会員。

一九一九年、ミーチンはコムソモール【ヴラジミール・レーニン名称共産主義青年同盟】に加盟し、ジトミール市のコムソモール組織の書記に選出された。一九一九～二〇年、第四狙撃兵大隊ボグーン【ウクライナ語では「ボフーン」】。一八世紀の英雄の名前に由来【連隊の特殊任務

部隊に従軍。一九二〇～二二年、ウクライナ・コムソモール中央委員会右岸地域ビュロー議長、キエフ、およびポドリスク県委員会書記。一九二二年、ヤコヴ・スヴェルドロフ名称共産主義大学【党、国家・地方の幹部養成のための高等教育機関】に派遣され、そこで課程を修めると、複数のモスクワの中等専門学校で社会科学を教えた。

一九二三年、彼はトロツキー派的な性格のゆらぎを見せ、そのため、党の諜報員たちによって作成された、疑わしい人物の特別リストにその苗字が記載された。このリストに名前が載ったものの多くが横死を遂げた。ミーチンの経歴にはこのことは何も書かれていないが、その忠実さを保障するもの【権力にとつての脅迫材料】として一定の役割を果たしたのかもしれない。

一九二五年からミーチンは赤色教授学院【ソ連の政権を支える高等教育Ⅱ研究要員育成のための、大学院レベルの高等教育機関】哲学科の聴講生となった。彼は修学に励むのではなく、党の路線に沿って、進み、将来、中央委員会に入り込み、酷評を受けない保障をえようと決心した。一九二七年秋、トロツキー反対派にたいする弾圧がはじまる前から党中央委員会煽動宣伝部が組織したキャンペーンに参加した。一九二八～二九年、彼は『革命と文

化】誌編集部に派遣され、そこでブハーリン派に反対する論文を発表した。一九二九年、ミーチンは赤色教授学院を修了すると共産主義教育アカデミーの副学長に任命された。

哲学において、ミーチンは自分の見解を明らかにすることなく、その当時公認されていた立場を擁護した。「レーニンと哲学」という論文において、彼は、当時ソヴィエト哲学界のリーダーであったアブラム・デボーリンの著書『思想家としてのレーニン』について、これを熱狂的に歓迎する評価を書いた。ミーチンはデボーリンの著書について「わかりやすい、生き生きとした言葉で書かれたこの著書はレーニンの哲学的見解、さらには弁証法的唯物論に関する最良の叙述である。レーニン主義にかんする文献の量の豊富さゆえに、デボーリン同志のこの小冊子はその質において際立っている」と書いた。のち、ミーチンはこの論文のことを自分の公的な経歴書には記載しなくなった。

一九二九年末、状況は根本的に変化した。スターリンは最終的に党内の反対派諸潮流を粉砕した。精神生活のすべての領域で彼の独占の承認と個人崇拜の植え付けが始まった。スターリン化に際して最初に犠牲となったもののなかに哲学があった。デボーリンはスターリンをマルクス主義の偉大な哲学者にして古典的著作の大家と位置付ける論文

を書くように、との党中央委員会の要請を断った。一九三〇年の年初から党中央委員会の諸機構はデボーリンとその学派、すなわち「弁証法派」を代表する論者たちをたいして体系的に圧力をかけ始めた。全連邦哲学会議の開催は禁じられ、雑誌『哲学の諸問題（プロブレム）』の刊行許可は取り消され、オックスフォードで開催される国際哲学会議へのデボーリンをはじめとする哲学研究所の代表たちの渡航には「待ったがかかった」。

このとき、赤色教授学院の修了生のなかに、組織的にデボーリンとその支持者に反対して発言するようになったものたちがいた（パーヴェル・ユージン、ヴァシーリー・ラリツェヴィチ、フョードル・コンスタンチノフ、ミハイル・カマリラ）。彼らのリーダーとなったのがミーチンであった。このグループの行動は党中央委員会煽動宣伝部、および、とくにこの問題を担当したエメリヤン・ヤロスラーフスキーによって調整されていた。このとき、そしてその後も続いた哲学におけるリーダーシップをもぎとる闘いは、まず一九三〇年四月二〇〜二四日に開催された共産主義アカデミー【社会科学を中心とした党・国家サイドの知識人による学術機関】・哲学研究所の党フラクシヨンと戦闘的唯物論者Ⅱ弁証法家協会のモスクワの組織との合同会議に

人を渡さない」。

ミーチンとその支持者たちは、事前に党中央委員会の支持を確保しつつ、デボーリン派にたいする攻撃を広げていった。一九三〇年六月七日、『プラウダ』紙上に有名な「三名の論文」が掲載された。ミーチン、ユージン、ラリツェヴィチはそのなかでデボーリン派に向けて政治的な罪過を挙げ、社会主義建設の諸課題からの哲学の立ち遅れを非難した。ミーチンとその仲間が提示したデボーリン派の主要な罪過は、彼らが哲学者としてのレーニンを無視している、ということであった。ミーチンらが罪状告発で挙げたことについて言えば、デボーリン派の理論的見解の問題を専門的に研究した論者たちは、この告発の無根拠性を明らかにしている。N・B・コルシユーフが書いたように、「弁証法派」、まずだれよりもデボーリンの見解に關する、はるかに度を越した目的意識的な捏造が座を占めていた。I・I・ヤホットは、ミーチンとその同類の真の目的が「スターリンにたいする度を越した個人崇拜」にあったために、彼らは「説得力ある事実を無視して罪状告発を止めなかった」ことを見事に明らかにしている。事実、レーニンの哲学的見解の研究を創始したのはデボーリン派であった。それゆえ、ミーチンがデボーリン派に對抗する

おいて聞かれた。デボーリンはその閉会あいさつで、新しいグループが哲学におけるリーダーたちから影響力を奪い、彼らにたいする信頼を失墜させようとしていると述べた。

党中央委員会煽動宣伝部長アレクセイ・ステツキーはデボーリン宅を訪ね、すべての学術におけるたつたひとつの権威、すなわち、スターリンの権威を承認すべきだ、と述べた。その後、ミーチン、ユージン、およびラリツェヴィチがデボーリンのアパートを訪ねた。デボーリンは次のように彼らの来訪を回想している。彼らは「わたしに最後通牒を突きつけました。公開の集まりでわたしは自分の教え子たちを人民の敵と宣告し、彼らを粉砕しなければならぬ、スターリンその人を偉大な哲学者と宣言しなければならぬ」と言うのです。まさにカテゴリー的に【無条件的に】リスクを冒すことだとはよく知っていましたが、この命令の実行は拒否しました。わたしの拒否のあと、わたし、および、わたしと考えを同じくするものたちに凶暴な攻撃が続きました。ミーチンは、もつとも醜いレッテルを貼るのに留まらず、とくに粗暴に振る舞いました」。一九五〇年代にデボーリンの調査係として働いたエヴゲニー・プリマークは、この聖ならざる三位一体にたいするデボーリンの回答を正確に伝えている。「わたしは自分の教え子や友

ために、一九三〇年代初めから占用していたマルクス主義におけるレーニンの段階」という定式は、スターリンの個人崇拜に奉仕するミーチンの努力を隠蔽する婉曲表現以外の何ものでもなかったのである。

ミーチンらは党中央委員会の支持をえて、デボーリン派をあらゆる行政的ポジションから追い出しはじめた。一時ではあったが、『マルクス主義の旗の下に』誌の刊行が禁じられた。一九三〇年夏、赤色教授学院哲学科は独立した機関、赤色哲学Ⅱ自然科学教授学院に再編された。ミーチンはその副院長に任命され、ユージンはその党組織の書記となった。一九三〇年一月一七〜二〇日「哲学戦線における状況」が共産主義アカデミー幹部会で審議された。これはもはや哲学的な議論ではなく、政治的な破壊行為であった。デボーリン派にたいする最初の組織的措置が採択された。一九三〇年一月二三日、ヤン・ステン、ニコライ・カレーフが戦闘的唯物論者Ⅱ弁証法家協会理事会から排除された。才能ある反対派を最後にいたるまで壊滅させるために、ミーチンはステンの反党的な見解を告発する密告状を執筆し、全連邦共産党（ボ）中央統制委員会に送った。この直後、ステンは解職となり、党から追放された。

一九三〇年一月九日、スターリンはミーチンその他の

赤色哲学Ⅱ自然科学教授学院党細胞ビューロー【党基礎組織の指導部】員たちと会談した。彼は、哲学におけるデボーリン派のリーダーシップを最終的に破滅させ、デボーリン派批判を、反対派にたいするイデオロギー闘争の一環として位置づけることを指示した。一九三一年一月、デボーリン派の見解を、無内容な結合語「メンシェヴィキ化する観念論」で特徴付ける中央委員会布告が採択された。この布告に従って、ミーチンは雑誌『マルクス主義の旗の下に』の編集長となり、事実上、哲学研究所に君臨した。

一九三二―三三年、ミーチン・グループのソヴイエト哲学界独占に対抗して、P・I・シャバルキンをリーダーとする赤色教授学院修了者のグループが旗揚げした。反対派「シャバルキン・グループ」は、ラーザリ・カガノーヴィチ【有力な政治家】の援助をえたミーチンによって圧殺され、そのメンバーは辺境に左遷された。一九三六―三七年、『マルクス主義の旗の下に』誌上におけるミーチン、ユージン、コンスタンチノフ、ヴラジーミル・ベレストニエフによる一連の論文が発表され、ミーチンとユージンが党組織と懲罰機関へ手紙を送ると、このグループは全員弾圧された。

ミーチンの指導の下で哲学研究所は墮落した。多少とも

官はスターリンへの手紙のなかでこの教科書を政治的に利益がなく、有害であるとしていた。ただちにミーチンは、この教科書を非難した最初の人物となった。自分が編集したものであったにもかかわらず、である。この教科書の執筆者の過半が弾圧された。犬儒学者にして出世主義者のミーチン自身は、権力の高みに進むためにマルクス主義を利用しつつも、そのマルクス主義を含め、何も信じてはいなかった。

彼はソヴイエト哲学者にたいする弾圧の主要なオーガナイザーのひとりであった。何百、何千といった才能あるひとびとの人生が破滅させられたのは彼のせいであった。彼が自分の論文で有害だと断じたものはただちに逮捕された。大量弾圧は哲学研究所でも進んだ。ミーチンに密告されたものを含め、初期の、デボーリン時代の研究員はだれもいなくなつた。ミーチンのもとで配下として働いていた研究員も将来を安心できなかつた。

一九三六年、ステンはその生涯最後の逮捕を迎えた【一九三七年六月二〇日銃殺】。ステンは『大ソヴイエト百科事典』第五七巻のために、長大な「哲学」の項を執筆していた。ステン逮捕のために、ミーチンはその手稿を入手し、原作者ステンを、「トロツキーⅡジノヴィエフ一味の反党

能力のある研究員は免職となり、もともとあつた五つの部門のうち、四つまでもが閉鎖された、国際的なコンタクトは縮小した。計画研究として、「唯物論者Ⅱ弁証法家としてのスターリン」、「富農の階級としての撲滅」などのようなテーマが「研究」された。哲学者の基本的な課題となつたのは、そのときどきの党のスローガンへの奉仕、好ましくない学者にたいするイデオロギー的迫害であつた。

一九三四年、ミーチンは論文審査なしで哲学博士の学位を授与されたが、その一年前には「教授」称号をえていた。一九三三―三四年、ミーチン編の教科書『弁証法的・史的唯物論』の刊行は、新しい研究所指導部による党の課題の遂行となつた。この教科書には、マルクス主義を限界までドグマ化したヴァージョンが幅を効かせていて、スターリンは最も偉大な哲学者というステータスにまで昇進していた。この教科書の理論的水準は低いと言わざるをえない。ちょうどその三分の一が哲学理論の問題ではなく、「哲学におけるふたつの戦線での闘い」に振り向けられていた。ここでの文体は放埒を極めていた。しかしながら、この教科書の著者たちは過度の熱心さを以て、反対派を過度に詳細に悪罵した。それゆえ、一九三六年、グラフィット【文獻Ⅱ出版事業総管理部。検閲を担当した政府機関】の検閲

的・反ソヴイエト的テロリスト活動のイデオログ」とする一節を加えただけで、この項を自分の署名のもとに刊行した。

一九三七年になると、ミーチンは研究所の研究員の集会で、「われわれの研究所内のトロツキストⅡファシストのエージェント、イデオロギー戦線における妨害者」を暴露するよう要請した。彼は、デボーリン派鎮圧で自分を助けた友人であつたラリツェヴィチの名を含む、被逮捕者の苗字を読み上げ、この件で達成された成功を自賛した。逮捕された哲学者、I・Ya・ヴァインシュテインの妻は、所長室を訪れて、ゆつたりと座っているミーチンに助力を申し込んだときのことを次のように回想している。ミーチンは、彼女が何ものか知っていないながら、「あからさまに悪意のある、冷たい表情で、『疑いえない理由がなければ、だれも逮捕されません。何もお手伝いできません』と言いました。そして、時計を見て、立ち上がり、『彼には一度も…（会っていません）』と言いたそうでした。わたしは、彼が何年もの間、ヴァインシュテインを知っていること、ヴァインシュテインが常にマルクス主義者Ⅱレーニン主義者であつたと反論しました。ミーチンは、鋭く言葉を遮り、この瞬間、ただちに部屋を出るように、そうでなければ、

民警を呼んで、わたしをどこかに連れていってもらう、と文字通り大声でわめきました。わたしには号泣を止められず、出てゆきました」。

この時期、ミーチンは、スターリンからイデオロギー的性格をもつテキストの準備に関する課題を受け取るため、彼の応接室を一再ならず訪れていた。スターリンから課題を受け取ると、彼は仕事を自分の配下にいる研究員に分け、自分は何も書かなかつた。彼の名前で出版された著書も、それかほかの人物が書いたものであつた。一九三八年の七月、スターリンは『全連邦共産党(ボ)史』小教程の「弁証法的・史的唯物論について」の項の準備に関する相談のため、ミーチンとユージンと会談した。会談の途上、スターリンはマルクス・エンゲルス・レーニン研究所の活動にたいする自分の不満、とくにこの研究所がレーニンの『唯物論と経験批判論』の付録に、二〇年前と同様、リュウボフイ・アクセリロード【メンシエヴィキに属したことのある古参革命家。機械論派的傾向を持つ哲学者。女性】の書評を再版したことに不満を表明した。一九三九年、ヴラジーミル・アドラツキー【マルクス主義の古典的文献の収集、翻訳、編集に尽力した哲学者、革命家】が占めていた、ふたつの研究所所長職【マルクス・エンゲルス・レーニン研究

所と哲学研究所】はミーチンとユージンが分け合うこととなつた。ミーチンはマルクス・エンゲルス・レーニン研究所長となり、党中央委員に選ばれた。

一九三九年、彼は科学アカデミー会員に選出された。科学アカデミーの党組織はデボーリンにミーチンの推薦を命じ、デボーリンはやむなく同意した。ミーチン選出がどのように行われたかはアヴネル・ジーシ【美学者・哲学者】の回想にある。「科学アカデミー会員候補の審議が始まると、デボーリンがミーチン教授を候補として提案した。『ミーチン教授というのは一体だれなんですか』という質問が出た。デボーリンは、ミーチンが、雑誌や新聞にしきりに登場している有名な哲学者で、国の哲学戦線の指導者のひとりであると述べた。つづいて第二の質問があつた。『どんな学術的な業績があるのですか』。デボーリンは応えに窮した。というのは、ミーチンには著書がなかつたからである。あるのは、『唯物弁証法の戦闘的諸問題』という作品だけであつたが、これは彼の新聞論説を集めたものにすぎなかつた。デボーリンはひどく困つた状態となり、『ミーチン教授は、メンシエヴィキ化する観念論』摘発で大きな功績があります』と言つた。どのようなことなのか、との質問に答えて、デボーリンはそれが自分と自分の

学派のことであることを述べなければならなかつた。わたし【ジーシ】は覚えている。ふたりのアカデミー会員が決然とミーチンの選出に反対して発言した。ひとりにはドミートリー・ペトルシエフスキーで、不同意を表明するのみならず、候補として提案されたことにも否定的な反応を示した。さらに、ペトルシエフスキーはデボーリンに温かい言葉をかけた。デボーリンは温かい言葉に感謝しつつ、ミーチン教授がアカデミー会員に選ばなければ、彼、デボーリンには、出席者が想像もできないような大きな困難、生命に関わる不愉快なできごとが俟ちうけているであろうと述べた。出席者は、しかし、みなこの不愉快なできごとを想像できたので、ミーチン教授はソ連邦科学アカデミー正会員に選出された」。

ゲオルギー・アレクサンドロフを支持する哲学者のグループが形成された。多くが共産党中央委員会煽動宣伝部の彼の同僚であつた。一九四一年、メンシエヴィキ化する観念論に関する中央委員会布告一〇周年を記念する哲学研究所の会議で、アレクサンドロフは党側の管理者として、ミーチンとユージンの活動を批判する演説をおこなつた。この時期、権力内部で大きな影響力をもっていたアレクサンドロフは、一九四三―四四年、ミーチン・グループ

にたいして、その支持者F・A・ゴロホフ、エヴゲニー・シトコフスキー、S・S・ピチュウギンらの逮捕や批判に繋がる、強烈な一撃を加えることができた。ミーチンにたいしては、『哲学史』第三巻【一九四二年、スターリン賞受賞。しかし二年後、スターリン自身が再検討を指示し、編集と執筆に加わつた古い哲学エリートが批判された】からスターリン賞を剥奪する党中央委員会布告も効果を發揮した。結果として、一九四四年、彼はマルクス・エンゲルス・レーニン研究所長、『マルクス主義の旗の下に』誌編集長のポストから解任され、ユージンは哲学研究所長職から解任された。これらのポストはアレクサンドロフの支持者が占めることとなつた【しかし、アレクサンドロフは一九四八年に始まる「哲学討論」の過程で批判され（一九五五年、最終的に失脚）、ミーチンは復権する】。

戦後もミーチンはノーメンクラトゥーラ【党内序列】・ヒエラルキーのなかで高い地位を保つたが、そのユダヤ人としての出自から、スターリンが有名な「コスモポリタニズムとの闘い」キャンペーンを展開したとき、客観的にはその攻撃対象となつた。しかし、彼はこの状況でも自分にとって快適な壁龕【壁の窪み。逃げ場】を見いだした。ソヴィエト遺伝学が壊滅させられた事件でトロフィム・ルイ

センコ【遺伝的性質が環境操作によって変化するとして、メンデル遺伝学を否定した農芸家出身の生物学者】を、イサーク・プレゼント【ルイセンコ主義を演出した哲学者】とともに積極的に支持し、ルイセンコ覇権の哲学的基礎を保証した。一九四八年のヴラジミール・レーニン名称全連邦農業科学アカデミー八月総会【生物科学におけるルイセンコ派の優勢を決定的にした】において演説したミーチンは「メンデル・モルガン派の反科学的概念をその最後にしたるまで暴露し、破滅させる」ことを要求した。彼は遺伝学を批判した自身の演説を単独の著書として出版した。

一九五二年、「コスモポリタニズムとの闘い」キヤンペーンのピークで、ミーチンは、マルクス・エンゲルス・レーニン研究所内で、明るみに出た、ユダヤ人の陰謀に参加したかどで告発されることを辛うじて免れた。一九四〇年代、レーニン廟のレーニンの遺体に防腐処理を施して有名になったボリス・ズバルスキー【生化学者】の著書が何冊か、ミーチンが所長を務めるマルクス・エンゲルス・レーニン研究所の印を押して出版された。予期せずして、スターリンはこの著作にイデオロギー的な攻撃をしかけた。この著書の写真家が、敵対的な目的で、レーニンの葬儀の写真のひとつを、儀仗兵のなかにいる人物の顔が

の、自分の所業の報復を受けている。ステン未亡人がラーゲリ【矯正収容所】から生還し、ミーチンがおこなった、『ソヴィエト大百科事典』「哲学」項盗作の問題を提起したのである。調査がおこなわれ、盗作の事実が明らかにされ、彼個人にたいする党の審理案件となった。党から除名されはしなかったが、『哲学の諸問題』誌編集長、モスクワ国立大学哲学部教授の職務からは去らなければならなかった。

晩年、ミーチンは名誉ある閑職、すなわち、科学アカデミーの海外イデオロギー潮流問題学術会議議長という職に甘んじなければならなかった。彼は、習慣となったことをし続けた。つまり、党中央委員会に哲学者、とくに、ボンファチー・ケドロフ【自然科学とマルクス主義哲学との和解を志した哲学者】に関する密告を書き続けたのである。

ミーチンは一九八七年一月死去し、モスクワのノヴォデーヴィチ墓地に葬られた。

#### ミーチンの作品：

・「マルクス・レーニン主義哲学の新しい課題について」（ラリツェヴィチ、ユージンと共著）『プラウダ』一九三〇年六月七日。

人民の敵トロツキーに似るように修正した」というのである。ズバルスキー、写真家ソロモン・テリンガートル、国立政治出版所副所長のI・G・ヴェリテは党から追放され逮捕された。一九五二年三月十八日、この問題に関する党中央委員会書記局決定が採択された。決定は、ミーチンが「ズバルスキーにマルクス・エンゲルス・レーニン研究所附属中央党文書館から文書を渡し、返却する義務について伝えなかった」ことに関してその責任を規定したものであった。ミーチンは、一九五二年四月十八日、党中央委員会附属党統制委員会の会議に召喚された。会議では「事件」に関する党統制委員会の決定が策定された。党統制委員会の準備のための資料は、ミーチンに、政治的近視眼性<sup>レ</sup>の罪を負わせていた。しかし、一九五二年五月六日の委員会決定では、彼の名前は、不思議なことに、消えていた。この場合、首領の個人的な庇護が話題になったのであろう。

一九五二年、ソ連邦共産党第一九回大会、一九五六年の第二〇回大会でミーチンは党中央委員に選出された。一九六〇年から『哲学の諸問題（ヴォプロスィ）』【前出の『哲学の諸問題（プロブレムィ）』とは別】誌編集長を務めた。この時期、彼は、それほど大したものではなかったも

#### ミーチンに関する文献：

- ・ソ連邦科学アカデミー編『マルク・ボリソヴィチ・ミーチン「ソヴィエト科学者の伝記のための資料シリーズ」』、モスクワ、ナウカ社、一九八一年。
- ・I・ヤホット「ソ連における哲学への抑圧（二）、（三）」、『哲学の諸問題』、一九九一年第九号、四四〜六八ページ／同第一〇号、七二〜一一五ページ。
- ・G・G・クヴァアソフ「スターリンによるアブラム・デポーリン・グループの評価に関する原資料」、『祖国の哲学—研究の経験・論点・方向—』、モスクワ、一九九二年、第一〇巻、一八八〜一九七ページ。
- ・N・B・コルシュノフ「一九三〇年代初めのソ連における異論派への抑圧と哲学論争」、『哲学諸科学』、二〇〇〇年第四号、七五〜八八ページ。
- ・E・G・プリマーク「メンシエヴィキ化する観念論の首魁の復権にむけて—科学アカデミー会員アブラム・デポーリンの調査係としてのわたしの仕事—」、『哲学の諸問題』、二〇〇二年第四号、八九〜九九ページ。
- ・N・B・コルシュノフ「ロシア哲学史家の研究における、いわゆるメンシエヴィキ化する観念論」（一九五二—二〇〇一年）（一）、（二）、『哲学諸科学』、二〇〇二年

第六号、五二〜七三ページ／同、二〇〇三年第一号、二五〜四六ページ。

### 【訳者解題】

本稿著者セルゲイ・ニコラーエヴィチ・コルサコフ氏は一九七三年生まれ。ロシア科学アカデミー・哲学研究所主任研究員。哲学博士。ボリス・ゲツセン、イヴァン・ルポール、ヴラジミール・アドラツキーらソ連時代のマルクス主義哲学者の事績の再検討を多く手がけている。

同じコルサコフ氏によるアブラム・デポリーンの評伝には邦訳がある（セルゲイ・コルサコフ／市川浩訳「アブラム・モイセイヴィチ・デポリーノ―再評価のための伝記的考察―」中部大学『アリーナ』第二号、二〇一九年、二〇〇〜二〇二ページ）。一時ソ連を代表した哲学者で、徹底して学究であったデポリーンはミーチン生涯最大の『論敵』であり、最終的に及ばなかったものの、『打倒』の対象であった。また、このデポリーノ評伝には、使われている文献資料も本稿と共通しているものが多いので、紙幅の制約からコルサコフ氏が本稿では提示を断念した典拠を辿ることもできる。訳者にご連絡いただければ、抜刷なり、PDFなりをお届けするので、併せてご覧いただきたい。

付度、上位のものの排除をみずからの出世の機会ととらえる傾向が被害を極大化した。ミーチンは、こうして歴史に登場した『大テロル』特昇組の先駆者であった。

デポリーノ派にたいする圧迫は「大テロル」に先行している。これはスターリンの能動的な意思によるものと考えられる。スターリンに関する研究は、旧機密文書の公開開始以降、およそ三〇年の間に長足の進歩を見せ、単純な全体主義国家像からより多元的な理解へのソヴェト社会研究の発展をともしつつ、多面的なスターリン像の探究が展開されている。科学史の世界では、スターリンの、ひたすら、知の権威を求めた側面が明らかとなってきた。また、スターリン自身が哲学問題では相当の主体性を持ち、いわゆる『ゴースト・ライター』も、特定の『助言者』や『顧問』ももたず、原稿をみずから草稿から練り上げていたことは今日広く知られている。スターリンはミーチンを必要としたわけではない。帝政ロシアに奪われた高等教育就学機会へのルサンチマン、みずから後継を自負した。先達『レーニンが放つ輝かしい、知の権威』にたいする強烈なコンプレックス、こうしたものゝがスターリンをみずからに替わりうる、知の権威を狩りに追い込んでゆく。ポロツクの労作 (Ethan Pollock, *Stalin and the Soviet Science*

歴史研究の今日的到達点に立てば、一九三六〜三八年をピークに猛威を振るった粛清の嵐、いわゆる「大テロル」の要因はいささかも単純化を赦さない。ウエンディ・ゴールドマンは、一九二九年には党内の反対派を一掃し、独裁体制をほぼ確立していたにもかかわらず、スターリン権力が粛清を発動したのは、元貴族、白軍にも平等に選挙権を与え、直接・秘密投票を約束した『民主的な』「スターリン憲法（一九三六年）」の本格施行を前に、農業集団化、社会主義工業化の強行のなかで蓄積された民衆の不満を、そらす、捌け口を準備しなければならなかったためとしている。しかし、一般民衆の不満はあまりに大きく、管理者層にたいする告発、糾弾の嵐が巻き起こり、権力の側でも制御不能になってゆく（ウエンディ・ゴールドマン／立石洋子訳「5 テロルと民主主義」、松井康浩・中嶋毅編『ロシア革命とソ連の世紀2 スターリニズムという文明』岩波書店、二〇一七年、一四七〜一七四ページ）。これに、ソ連を取り巻く国際環境の悪化（一九三六〜三七年にはドイツのラインラント進駐、蘆溝橋事件、日独「防共協定」締結、スペイン内戦での左派の敗北があった）を背景とするゼノフォビアが著しく拡大、そこにソ連国家の複雑な多民族性が絡み合っており、過度のマスヒステリア状態が醸成されていった。さらに、過度の

(Wars, Princeton University Press, 2006) は後期スターリン期における彼の『知の権威』追求を活写している。

ちなみに、ミーチンは二回来日している。一回目はソ連共産党中央委員として一九五八年七月の日本共産党第七回党大会に派遣され、二回目は、一九五九年一月から二月にかけて日本哲学会、日本唯物論研究会の招きで来日し、各地で講演をおこない、精力的に日本人哲学者と交流している。しばしばスターリニズムの監視塔とみなされていた科学アカデミー・哲学研究所は、スターリン死後の急速な『脱スターリン化』のなかで、科学者やその他の知識層からの厳しい批判を受けた。哲学研究所の国際化はその生き残り策のひとつであった。ミーチンの来日はこうした文脈で捉えられなければならない（市川浩「研究ノート」マルク・ミーチンの来日をめぐって」『唯物論と現代』第五七号、二〇一七年六月、八一〜九〇ページ参照）。

二〇一九年十月三十一日、訳者はモスクワでコルサコフ氏と会い、翻訳について種々相談したが、別れ際、氏からミーチンの墓には墓誌と墓碑もなく、一見誰の墓かわからなくなっていると聞いた。「ペレストロイカ期」のスターリニズムへの風当たりがもつとも強かった時期に亡くなったためであろうが、ミーチンが長く勤務した哲学研究所も、

家族さえも墓誌・墓碑建立を断つたと言う。コルサコフ氏は「フシヨール・エート・ポカザーチェリノ（これがすべてを物語っている）」と吐き捨てるように言い、去っていった。

訳文において、本来、人名はその初出箇所で原綴りと生没年を表記すべきであるが、ここでは紙幅の都合からそれを避けた。ロシア人の名前は名・父称・姓の三つの部分からなり、通常、前二者はイニシヤルだけが表記されるが、ここでは可能な限り、ファースト・ネームを記しておいた。イニシヤルだけを表記する場合、キリル文字はローマナイズした。訳注は最小限にとどめ、本文内に「」に入れて示した。訳注の出典は、多くの場合、ロシア語版ウィキペディアなどインターネット・ソースである。

（いちかわひろし・広島大学・科学技術史）